吉田さんから田中さんへ

本紙原告団のページで、遺族とCO患者についてのレポートが大きく反響を呼び起こしています。こんど、田中綾子さん（遺族）に関するレポートを読み、わざわざはげましのお便りをくださった方があります。吉田弘子さんという方で、ここにその抜すいを紹介し、感謝の意をあらわすことにいたします。

大変ありがとうございました。あなたも、ぜひしあわせを勝ち取っていただくよう、がんばっていってください。心から祈っております。なお、吉田さんのお住まいは「大牟田市小浜町四四母子寮内」です。

編集部

しあわせいっぱいの道はないけれど……

拝啓、突然お便りいたします事おゆるし下さい。私は〃みいけ〃（本紙のこと）の「原告団」という新聞を見、感どうし、胸をうたれて、いまお便りを書かせていただいております。

私も七月までは昼・夜働いており、三十一年間色々とあり、現在は子ども一人引きとって母子寮に住まわせていただいております。

貴女様も大変だと思いますが、実の母にお子様と三人いるじゃありませんか。

私など結婚に二度もしっぱい、二人の子どもは私の手もとを離れ時々あいにくるだけですよ。

私のばあい、親子共々死をかくごし、今やっと普通の人間になりつつあります。私の事を思えば、貴女はしやわせではありませんか。ガンバッテ下さい。

私は今人様に意見できる者ではありませんけど、七月など六万位の収入はあっても、何につかったかわからないくらいです。明日は月二度目の休み。（月に、二度しか休みはありません）お互い母子家族であり、同じ苦しい仕事をする仲間と思われ、心うたれました。

貴女はお子様を大切に、お母様にささえられていらっしゃるようす。ガンバッテ下さい。

私は、義理の母、父は実の父だけれど、死んでしまいました。でも、多くの暖い人々にはげまされ私は血をはきながらも仕事は休まず、病気にも仕事にもうちかっていますよ。だから、あなたには、しあわせいっぱいの道はないけどみいけの組合員がいるし、強く生きる道がありはしませんか。せいいっぱいがんばって下さい。

そちら様の長男様が清掃屋の一員で、二番目の子どもさんは新聞はいだつをされているようす。手に取るようにわかります。

どうか気を大きくもって、子どもさんを楽しみにがんばって下さい。かげながら、皆様の健康と幸福を願いつつ文をしたためさせていただきました。

岩手の伊藤恵子さんからも

お変りございませんか。

こちらは、朝夕など冬を思わせる寒さです。そんな中で、風邪もひかず頑張ってます。

十月六日分会大会を終え、十月八日にCO患者守る会の総会を持ち、会の運営など話し合いました。組織していくことのむずかしさをつくづく感じ、頭をかかえてしまいました。

でも、自分の力でできることだけはしていこうと思っています。よろしくお願いします。

×

伊藤さんは、〃宮古地区CO患者守る会〃（山本和憲会長）の貴重な活動家で、お住まいは「岩手県宮古市和見町一〇一三四」です。ご健闘を心から祈っております。

座りこみの闘いに思う

三池大爆発遺族のための誘致工場としてスタートした荒尾アソニット工場と三池縫製工場は、誘致工場とは名ばかりで、いまでは遺族を逆に苦しめる工場として非難の矢を浴びている。それが怒りを呼び起こし、さきの両工場正門前での座りこみへと発展したのだった。さてこんどの闘いに参加した遺族は、闘いのなかで果たして何を感じたのだろうか。

広がる団結の中で

アソニット　森　キヨカ

アソニット工場は、いま七百五十人以上もの従業員で、五つの工場をもつほど大きくなりました。でもそのいしずえを築いた遺族たちの取り扱いはまったくひどいものである。

私たちは、三井鉱山に対する要求とあわせ、直接工場にも要求（十三項。省略）をつきつけて闘った。

その日、十三日には朝七時頃になると、スラックス姿の遺族たちがぞくぞく正門につめかけてきた。

三番方あがりの、四山指導部の組合員十二名は、坑内の高温職場での労働の疲れもいとわずかけつけ、三川指導部十一分会万田訓練所のCO患者の人たちとともに、みるみるうちに天幕をはってもらうと、立派なピケ小屋ができあがった。

主婦会の応援もあり、午前七時半座りこみ宣言。原告団のタスキをかけ、整然と座りこみに入った。

そろそろ出勤してくる人たち。固くとざされた門の小門を開け、ビラをうけ取って入っていく。

三神社長は、ジャンパー姿でいったりきたり。三池鉱業所からも労働課からやってきている。

昼近くなっても、正門近くで開かれる青空市場は今日はでない。聞けば、「今日は異常だからこないように」と電話があったとか。

昼には見ていると、社長が皆を食堂に集めた。後で聞くと、社長が「遺族が座りこみをしているが、皆に関係ない」といったという。昼休みに、天幕の中にかけこんできて「関係はあるよ。おばさんたちにばかり闘争させてすみません」という人もあるのに。

アメ玉のカンパを置いて、走っていった。昨年の成果と思う。

この日三池労組員は時限ストに突入。私たち原告団を包んで闘ってくれた。

私たちは、こうして広がる団結の輪の中でさらに強く、残された要求を獲得するため闘わなければならないと思っている。

やっぱり闘うこと

縫製　高橋　シゲ子

九月十三日朝七時半、三川指導部十一分会新港作業所の人達によって天幕がはられ、スラックス姿で私達は座りこみに突入した。

「弱い、弱い」といわれる私達は、「一ぱつみんなでやろう」と意志統一したので、みんなはすっきりした表情だった。

主婦会の人、CO家族の人達にも応援に来ていただいた。三田さんも、杉野さんも。この人びとは年金もないのに、ほんとにすまないと思う。

ましてや、九・二八の遺族、上村ばあちゃんはあのトシで来てくれた。提訴中という理由で、会社は何一つ遺族としての取り扱いもしていないのに、同じ取り扱いをさせねば申しわけがない、とみんなで話し合った。

座りこみ中、自転車で前を通りかかった人が降りて来た。この人はすぐひっ返していったが、「お金をとりにいったのだ」といって、ビール一打とファンタ二十本（三千円相当）をカンパしてくださった。

「私は第二組合員ですが、三池労組こそ本ものだ。頑張って下さい」と、激励していただいた。

夕方、十一分会の人達といっしょに乾盃した。

三池労組も、時限ストで共闘してくれた。やっぱり闘うこと、団結することだと、みんなで話し合っている。

（要求は省略）

恐怖の体験記

その4

三池大爆発、坑底からの告発

故　松島義信・遺稿

しかし私は、いつまでも呆然としてはおられない。いつまでも、悲しんでばかりいてはいけない。せめて私の分会からは、一名の犠牲者もだしてはいけない……と、沈む気持にむち打って、まだ悪臭のひどい本線を詰の方に向かって進んで行った。

一人ひとり、倒れている人を確めて進んだが、心の中では、どうかこの中に、私の分会の三人の人がいないようにと、それこそ神にもすがる気持だった。

こんなことをいったら、倒れている人たちに対して大変失礼に当たるし、さぞ怒られるだろうと思ったが、私の立場を理解していただいてお許し下さるように心に念じて進んでいった。

やっと全部の人を確かめ、その中に三人がいないことを確認した私は、さらに奥の方へと進んだ。しかし、見つけることはできなかった。

その内私は、頭の中が針でつつかれるような痛みがはじまった。一緒についてきてくれたHさんが、「もう危いぞ、一度引っ返して、しばらく休んでからでなおそう」と、忠告してくれた。私もそれ以上進むには、頭の痛みがますます激しくなったし、自信がなくなってきたので材料線坑道の捲き立てまで戻って、しばらく横になった。そのときは行くときと違って、相当数の人たちが発見され、比較的元気な人たちから看護されていた。

その中に三人がいるのではないかと思い、分会の人に頼んで探してもらったが、その中にもいなかった。

やがて、体の疲労も軽くなってきた。

再びHさんと、こんどはTさんにもお願いし、先程行った所よりさらに奥の方に探しに行った。

向うから被災したなかまを、背中におぶってくる人がいる。「奥の方に、まだ倒れている人はいなかったか」とたずねると「いやもうこれから先には、誰もいなかったですよ」と答えた。

それなら排気道を探してみようか、と三人で排気道に入った。通気門は二重につくってあるが、二つとも吹っ飛んでいた。

その二つ目の門のすぐ脇に、一人うつぶせに倒れている人がいた。同じ職場の、新労組員の人だった。

さっとその両脇から、二人がかりで抱きあげ、一人が安全灯をはずして持ってやり、捲立線まで連れて行って、残っている人に看護を頼み、すぐ引っ返して詰に向かった。

もうその時分は、においもうすれかかっていた。もやのようなものもとれ、見通しもずい分良くなっていた。

時刻は、はっきりと記憶していない。その夜も、十一時に近かったのではなかろうか。救護隊の先発隊が、宮浦鉱から入坑して、やっと現場に着きはじめた。

医者がきた。

事故が発生してから、七～八時間もたっているのではないだろうか。ずい分ゆっくりきたもんだ、と私は少々あきれた。

係員から、「救護隊がきたので、一番方、常一番の人から順に昇坑して下さい」と指示を受ける。しかし三人の分会員が見つからぬ以上、私としては昇坑することはできない。

分会員のなかまに、もう一回詰の方を探してくるから、それまできつかばってん待っていて下さい。と頼むと、皆気持よく承知してくれた。やっぱり三本線のなかまは、同僚を捨てて行くようなけちな人間はいないなあと、私はつくづく思った。

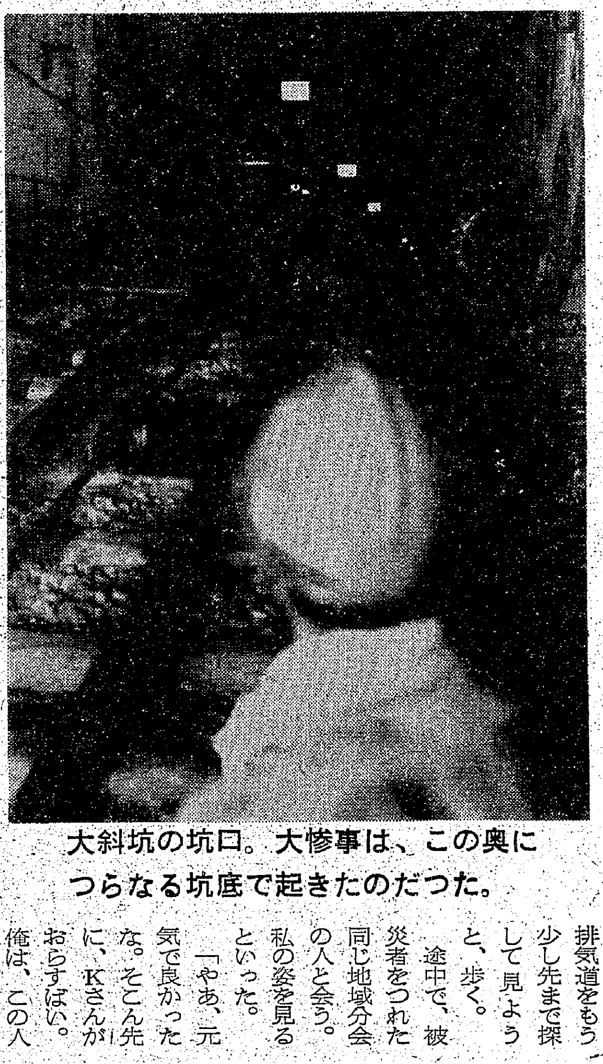
私はHさんと二人で、先程の排気道をもう少し先まで探して見ようと、歩く。

途中で、被災者をつれた同じ地域分会の人と会う。私の姿を見るといった。

「やあ、元気で良かったな。そこん先に、Kさんがおらすばい。俺は、この人あんた達がつばつれとるけん、あんた達がつれてきてくれんな」

Kさんは、私の親友である。家も向かい合わせで、地域ではともに副分会長をしている。また、運搬分会の分会長でもある。

私は急いだ。きっと倒れているものとばかり思ったKさんだったが、しかし驚いた。何ということだろう。Kさんは、本線坑道の真ン中に仁王立ち。一生懸命何やら訳のわからないことをしゃべっていた。



大斜坑の坑口。大惨事は、この奥につらなる坑底で起きたのだつた。